看護職者の学習要求を形成した体験と意識の調査研究

—編入学教育に生かす学習者特性の課題—

平 河 勝 美*¹

Investigation in Nurses' Experience and Consciousness as The Formative Factor of The Learning Needs: Educational Issues Dealing in The Learner's Characteristic of The Nurses

Katsumi HIRAKAWA*¹

*¹ Graduate School of Education, Kobe University

Abstract

The purpose of this study is to investigate nurses' experience and/or consciousness that have formed their learning needs and their desire to enter the baccalaureate course of nursing, in order to investigate the adequacy of RN/BSN course. 22 nurses who have graduated from junior colleges and have desire to learn more under a RN/BSN program are interviewed.

The analytical focus is placed on the relationship between two kinds of consciousness; fundamental consciousness/experience of the learning needs, and self-consciousness. The findings are as follows:

- 1) All subjects are classified into 3 types according to the categories of consciousness in which they fall, mainly due to the difference of their aims and/or their learning needs.
- 2) The first group, "external", includes 13 subjects who show intense concern over their daily nursing practice.
- 3) The second group, "intersubjective", includes 5 keen observers of contrasts between patients and themselves.
- 4) The last group, "internal", includes 4 subjects who feel stronger needs for self-improvement than for professional training.
- 5) As an educational issue, it is the perspective of the nurse-as-learner that teachers in charge of RN/BSN course have to understand.

Two conclusions emerge out of these findings. 1. Teachers are recommended to sympathise with the nurses' balance of social and individual consciousness, which has formed through nursing experience and/or daily life. 2. RN/BSN course ought to include some programs to correct nurses' tendency that set the valuation at rather lower level, around their own nursing capability.

要 旨

本研究の目的は、編入学教育の構想に資するための、看護職者の学習要求を形成している体験や意識の明確化である。

調査対象は編入学資格を有し、それを志望している看護職者22名であり、調査方法は半構成的面接法である。調査内容は編入学を志向するに至った経緯、印象的だった看護体験

*¹ 神戸大学大学院教育学研究科修士課程

や生活体験などとし、その中から、編入学志向の根底にあると解釈される意識と自己意識との関連性を分析点とした。

対象者は3群に分類された。それらは、日常の看護実践に関する課題意識が特徴である「外在」群、他者との関係や相互理解に関心の強い「間主観」群、自己陶冶や省察の要求が特徴的な「内在」群である。また、編入学教育者が追認すべき要素として、学習要求を形成する意識の中の“社会”と“自己”の比重とその変動、看護実践能力の不足感が形成する能力観や自己能力評価などが確認できた。

はじめに

教育とは、人間の尊厳を重んじ、その人格完成を意図して働きかけるいとなみである¹⁾。したがって教育者には学習者の人権と人格を尊重する態度が求められる。例えば、学習者を教育の客体と捉えて対面的に向き合うだけでなく、学習の主体と捉えて同方向的に追従する姿勢などである。

学習とは、何らかの知見の吸収や再創造によって内面に長期的な変容を起こす過程である。学習は教育と異なり、意図性や系統性を必ずしも要しない。日常生活体験によっても人間は偶発的に何かを学習し、その結果内面的にいくらか変容している。生命現象と生活現象は学習の母体である²⁾。

以上を踏まえて看護系大学の編入学教育を考えると、編入学生の人格は編入学以前の様々な体験が育成した存在であり、教育者は編入学生の人格を了解して教育構想に反映させなければならない。そのためには、看護診断について学びたいとか心理学をやりたいなど表面的な学習要求に止まらず、その根底にある意識の様態が現実的課題となる。しかし大半の編入学課程が漸くこの数年間に設置され始めたばかりであり、看護教育界はこの課程の経験知を広く共有するには至っていない。この分野の研究成果^{3~5)}を端緒に、この課題に対する経験の途を歩み出したところである。

研究目的

本研究の目的は、編入学を志望している看護職者の学習要求がどのような体験あるいは意識から形成されているのかを明らかにすることで

ある。つまり学習要求を多角的多層的に読み解くことを主旨としている。学習要求を形成するのは学習者の主体であり、その主体自身が意識作用の対象となる自己意識は学習要求理解にとって重大な鍵となる。本研究はこの点に立脚して構想したものである。

調査方法

調査対象は、短期大学を卒業して兵庫県の県立病院に勤務している看護職者であり、この調査に先立って実施した学習要求に関する質問紙調査⁶⁾によって編入学志望者であると確認できた37名から抽出した22名であった。編入学志望者のみを対象としたのは、編入学という学習行動を起こす可能性が高く、教育課題としての現実性が裏付けられやすいためである。なお、短期大学は看護系に限定していない。

対象者には質問紙調査前に研究目的、面接調査を依頼する可能性、プライバシー保護について書面で説明していたが、本調査依頼時に拒否する権利も含めて口頭で確認を取った。調査方法は半構成的面接法を用い、対象者の了承を得て面接内容を録音した。

主な質問内容は、編入学志向に至った動機や経緯、印象に残っている看護体験や生活体験、学習要求の具体的内容、編入学に関する認識とした。時間的制約を考慮し、編入学志望に至った経緯や動機から質問を開始した。面接所要時間は平均55分であった。

調査時期は平成6年11月から7年1月であった。

分析にあたっては録音された面接内容を逐語的に書き起こし、話し言葉の一文は必ずしも明確でないので分析単位を文節ないしは文章とし

た。そして意味内容の区切りごとにコード化した後、全コードを比較検討、整理した。また、分析の一貫性のために約6ヵ月後に再分析した。

今回の報告にあたり、以上の分析結果から、①編入学志向の根底にあると解釈される意識、②生育歴や性格特性などの自己意識を抽出した。次に、①と②の間の何らかの関連が語られていたか、面接全体を通して主に語られていた内容は何か、などを参考にして①と②の関連性を調べた。

結 果

1. 対象者の特性

対象者は男性1名、女性21名で、既婚者は4名であった。看護の臨床経験年数は平均5.6年であった。

卒業した短期大学で見ると、看護系3年課程卒業生19名、看護系2年課程卒業生2名、看護系以外の短期大学卒業生1名であった。役職では主任1名と婦長1名が含まれていた。

2. 編入学志向の根底にある意識と自己意識との関連性

分析の結果、編入学志向を根底で支えていると解釈された意識として、「学習時間のゆとりへの欲求」「研究に関する意欲」「より良い看護実践の追求」「職業移動・職場移動に対する抵抗感のなさ」「学歴の劣等感」「短大時代とは違う学びができる自信」など44のコードが抽出された。自己意識としては「プラス思考」「負けず嫌い」「意見・意志表現の乏しさ」「看護実践を通じた自己変容の実感」など28のコードが抽出された。

前者の意識と後者の自己意識との関連性には、対象者ごとに強弱が読み取れた。そこで各対象者ごとに自己意識の範囲を仮定し、編入学志向を根底で支える意識が主にその範囲の外にあると思われる対象者を「外在」群とした。同様に、主に自己意識の範囲の内にあると解釈された者を「内在」群とした。また、他者意識が重要な鍵になってこれら2群に該当しにくい者を「間主観」群として、全対象者を3群に分類した。

以下に各群ごとに対象者の意識の特徴と構造図を、典型的な実例を含めて報告する。

1) 「外在」群

この群の対象者の編入学志向の根底にある意識は、看護実践改善への模索、大学教育に対する期待、新たな資格取得と活用などに集中する傾向にあった。他方、自己意識は比較的表现されなかった。この群に分類されたのは13名であった(図1)。

〔事例A〕

「解剖と病理と生化学だけではないと、患者の状態が把握できないことだらけなんです。患者と話して身体を拭いたり、そういうケアも大事になってくるけど、集中治療室では医者より先に患者の変化に結び付けていかないと。肝臓が悪いからこうなって今の症状に表れているっていうのを、逆から見ていたり。そういうことが望まれている。それがわからないまま働いているのが、すごく辛い時がある。勉強すれば良いんでしょうけど、莫大な量ですよ。学生の時にやっておけば、今本を開いている時間に別のことができたんじゃないかと思うことがあります。特に看護診断が。解剖や病態生理や生化学がわかっていれば全部答えられる。だから看護診断が出てきて余計思うようになったんです」

〔事例B〕

「薬一つにしてもその使い方とか、その子のデータによって看護も全然変わるし、対処方法も違う。でもそれって、皆一緒にできるって思ってたから、何か同じように考えていたら、それ違うって言われて。最近、女の子でステロイドの多量療法で精神的ダメージすごい受けてしまっ。そんなのは全然。ステロイドで精神的ダメー

図1 「外在」群に分類された対象者13名の意識の構造

ジ受けるのは聞いてたけど、実際こんなのは全然イメージできなかったし、どうしたらいいのか全然出てこない。実際、どうしたらいいのか。初めて自分で何か勉強したいというのが。結構最近。何年かしたら。最初は仕事覚えるので必死だったけど、何年かしてそういうのが出てくる」

〔事例C〕

「その人にとっては看護婦がいないと回復して行けないけれども、大きな流れの中で、まず、ドクターの意思がないと進まない。この人はこの治療を望んでいるのかになって、誰が見ても無駄なこと、何週間か何時間か命を延ばしてどうなるんだろうというような、処置や治療がありますよね。そういうのがわかってしまうと、(ドクターに)従って、逃げのもとで仕事しているのが看護婦なのかなと」

事例AとBは、臨床看護に従事して改めて看護実践にどのような知識と能力が必要なのかを発見し、自分にはそれらが不十分だと気付いている。そしてこの気づきが学習活動を志向する原動力となっている。このように看護実践の根拠となる知識や論理的思考能力などを獲得したいという体験や意識を有している者は、この群の大半を占めていた。他方、事例Cは医師との関係性の中で看護独自の役割機能の限界を感じ、強く失望したことが学習活動を志向する動機になっている。

2) 「間主観」群

この群の対象者は、編入学志向の根底にある意識と自己意識の他に、看護実践で出会う他者の存在と人格、及び人間関係を重点的に意識していた。意識が自己の外側に向かっている点では「外在」群と共通しているが、他者意識を加えた間主観性に特徴があった。他者として語られていたのは全て患者であり、この群には5名が属していた(図2)。

〔事例D〕

「その子の体験していることとか少しは理解できるけど、複雑ですから。家庭環境も結構あったり。勉強してきた心理学は自分と置き換えて

図2 「間主観」群に分類された対象者5名の意識の構造

いたんで。患者はまた複雑なので。他の人と話して初めて理解できることも多くて、それも学問的だったりそうでなかったりしますけど。取り組んでできない部分もあるから、その子の看護までは至らなかったことはあります。その子が成長して変わっていくのを長い目で見なくてはいけない部分もあるし、自分が傷つくのも怖いし、その子を傷つけても変えられないかもしれないし、当たらず触らずですね。チーム看護ではしてはいけない部分も出てきて、自分も引いてしまう方なので、仕方ないんです」

〔事例E〕

「患者と言ひ合ひして涙流して帰ってくることもあったんですけど、患者の立場が理解できるって言うか、言わざるを得ない状況なんだなってわかって。それは感情的な部分なんですよ。自分が怒るといっても感情だ。怒った原因を自分の中で探して、私はこういうところを言われると怒るなっていうのがわかれば、次の対応の時には衝突が少なくて。違う看護婦も行くので、その時はそれなりに患者も違うケアも受けられる」

事例Dは環境要因などを含めて患者を了解する難しさを、事例Eは患者と自分の対比から両者を了解する有益さを意識している。また、どちらもチーム看護に言及しているが、その意識の方向性には興味深い相違が認められる。事例Dはチームが自分の実践に制限を加える側面をあげたのに対して、事例Eはチームが自分の実践を補充する側面をあげたのである。

3) 「内在」群

この群では、対象者の編入学志向の根底にある意識は看護の課題ではなく、むしろ自分の人生に対する課題意識が直接的に編入学志向を形成していた。この群に分類されたのは4名であった(図3)。

〔事例F〕

「自分を高めたい気持ちは強いんですよ。今のままでいいのか。今は変化を求めている時期なので。吸収したい気持ちで変化を求めている。新しいことにチャレンジしたい、新しい何かを吸収したい。極めることも大事だけれども何か新しいものを吸収しないとこれ以上極まらない、みたいな。能力的には限界も感じてるから。燃え尽きじゃないんですよ、全然。もっと貪欲なんです。自分にプラスになるものが欲しい」

〔事例G〕

「(短期大学における看護の学習が)職業にも役だってるし、同僚との関係とか他の職業の人との関係とか考えると、役立ってる。看護概論みたいな、看護論みたいなのでしょうかね。あの勉強をしてなかったら、今の自分はきっとこんなではないだろうなという、自分の伸びたかなと思うところがなかったやろな、とは。有ってきた環境も大きいと思うんですね。うちの親はマイナス志向で、考え方が。で、小さい時からその影響を受けてるなと。学生時代も(アルバイト先で)じっとしていてコツコツ自分だけの仕事に拘っていたのは、そういう影響を受けてたん違うかなと思うんですよ。それは今になって思えば、なんですよ。でもこの職業についてこういう勉強をした時に、まだ多少は(親の影響が)残ってる、多少じゃなくて大分残ってるし、友だちにそう言われる時もあるんですけど、

それでも自分の中では、長い20何年間生きてきた中では、変わったところも多少はあるんでね。友だちには気付いてもらえない変わったところっていうのは、学校の勉強が大きかったかなという気がしますね」

事例FとGは共に自己変容について、事例Fは未来に向けてのそれを、事例Gは過去を振り返ってのそれを意識している。時間的方向性は異なっているが、自己変容が教育との関連で意識されているところは共通している。特に事例Gは漸く短期大学での学習を意味付けているのであり、教育が人間形成となって結実するのには時間を要することを示す好例である。

考 察

1. 結果の解釈

1) 3群を総括した解釈

編入学志向の根底にある意識と自己意識との関連性は、「外在」群から「内在」群に向けて順に“社会化”の程度が減じ、“内面への対峙”の程度が増えていると解釈される。これに対して“社会”と“自己”を両極とする連続体を想定してみると、その連続体上の随所から学習要求に繋がる課題意識が生じていると考えられる。事例Dの心理学の活用状態や事例Gの家庭環境からの解放など、各対象者の意識においてはこの連続体上の様々な部分が相互に関係していた。つまり、この連続体は全対象者に対して一つ、各対象者ごとに一つを想定する必要がある。

編入学の教育者には、教育課題をこの連続体上でダイナミックに移動させる柔軟な意識が求められよう。必要に応じて“社会”と“自己”を適宜に焦点化する創造性と均衡意識が教育課程編成やガイダンスなどに生かされれば、看護実践を通じて社会参加してきた編入学生の学習要求により良く適えられるであろう。

2) 能力に関する意識

能力に関して、事例B、D、Gなど、看護基礎教育による学習内容と就職後の実践体験を統合的に意味付けする学習能力が注意を引いた。他方、事例A～DやFに見られるように、わか

図3 「内在」群に分類された対象者4名の意識の構造

らない、できないなどの否定的な感覚と編入学志向の繋がりも注目に値する。この傾向は他の対象者にも広く認められるものであった。

このように客観的に評価できる高い学習能力の一方で、主観的には看護実践能力の不足感が大きいことが特徴と言えよう。この能力不足感の背景には実践して得た看護的的確な理解があるのだろうが、彼らは熟練によって能力を確実に向上させてもいるはずである。能力向上を適切に自己評価できていないとすれば、問題である。

したがって編入学の教育者は、看護実践を支える強い使命感、実践して生じる疑問や不全感などを共有し、これらの感性が支持している能力観を追認、追体験してみなければならない。編入学生が彼らの能力観と自己能力評価との間に均衡を保つことが教育課題となろう。

2. リカレント教育としての編入学教育の教育的価値

編入学生となるのは離職して教育を受ける看護職者が多く、編入学はそのリカレント教育の場と捉えることができる。

リカレント教育はOECDが提唱した教育戦略であり、教育を全生涯において労働や余暇などと交互に分散配置するものである。その理念は過去のエducational機会の不平等を生涯という時系列の中で均等化することと、職業経験と教育を統合することである。また、リカレント教育を成立させるのは、教育以外の場面における偶発的な学習が人間形成にとって極めて重要だという見識である⁷⁾。

学習の偶発性の例として、事例Aは集中治療室に配属されたことを契機にそこで求められている看護の特性に気付く、学習要求を強くしていた。事例Cは医師の治療方針が自分の医療観や看護観にそぐわない現状に落胆した結果、その意識を学習に結び付けようとしていた。このような偶発的体験は、主体性を欠いては“学習”にならない。体験の主体的な取り込みが編入学生の特性であり、その特性の意味付けが教育課題となる。

したがってリカレント教育としての編入学の

教育的価値は、現場体験を学習として積極的に評価する“脱学校”的な考え方と“学校”としての大学教育との統合である。また、その統合を看護教育が実現する意義も大きいと考える。

3. 成人の発達可能性の問題

編入学生は年齢的には成人期に該当し、豊かな体験を蓄積しており、その特性は成人性にあるとも言える。成人性は、一方では認識の枠組みを頑なに保持する保守性に繋がり、他方では体験に意味付与して学習を豊かにさせる可能性にも繋がっている⁸⁾。成人学習者である編入学生にとって体験から形成された認識枠組みは自分らしさそのものであり、彼らが保守化するのには当然の反応である。

編入学生が自己の内面に対峙し省察するには認識枠組みの変容を伴うことが予想され、それまでに築いた自分らしさを作り直す困難な作業になると思われる。ここに教育者として追体験すべき一つの要素として、編入学生の学習に伴う“痛み”があげられよう。事例Fのような自己変容を強く望む意識は、仮に編入学した場合に教育課程などを抵抗感なく受け止めるかどうかとは別のものである。動機の強さと意識変容の可能性とを混同すると、援助の適切さを欠くことになる。

教育課題としては、成人期の発達可能性を信頼できるかどうかである。保守化して可能性を閉ざす場合も含めて、変容の多様性を認知、受容し、援助することが求められている。成人の発達は段階的な直線モデルではなく、むしろアイデンティティの危機と確立を繰り返す螺旋モデルで説明する方が適切だと指摘⁹⁾は、編入学教育にとっても示唆に富むものである。

おわりに

教育は人間形成の意図性を本質とするため、学習者の要求と教育意図との“距離”が問題になる。その距離は、看護職を選択した15歳あるいは18歳の人々を学習者としている場合と編入学のように学習者が多様な場合では当然に異質なものである。その異質さが編入学教育者に専門性を求めている。要求課題を公共的課題に転

じるにあたってこの距離に問題意識を抱く限り、学習者の位置の把握を第一の教育課題とするしかないのである。教育制度としてだけでなく看護学の教授・学習過程として大学と短期大学の教育の差異は何か、編入学課程における職業教育と一般教育の両立はどうあるべきかなどの課題に対し、今後も学習者特性の視点から取り組み続けたい。

(本報告は平成6年度文部省科学研究費(奨励研究A)の助成による研究成果の一部である)

引用文献

- 1) 中内敏夫他編著：現代教育学の基礎知識(1)，49，有斐閣，1976.
- 2) 荒瀬豊他：岩波講座現代教育学1 現代の教育哲学，2-8，岩波書店，1960.
- 3) 大賀明子：看護系大学編入学の実態と看護教育制度—日本における看護系大学編入学に関する実態調査から，看護教育，31(1)，24-32，1990.
- 4) 河野祐子他：看護大学編入学生の学習ニーズに関する実態調査，聖路加看護大学紀要，No.20，40-48，1994.
- 5) 平河勝美：看護系大学編入学課程の現状に関する調査，看護教育，35(3)，225-232，1994.
- 6) 平河勝美他：編入学資格要件を持つ看護者の学習要求の研究，日本看護学教育学会誌，6(1)，53-61，1996.
- 7) OECD編，岩木秀夫訳：リカレント教育，現代のエスプリ，No.146，130-140，1979.
- 8) 永井健夫：認識変容としての成人の学習—J. Mezirow の学習論の検討—，東京大学教育学部紀要，29，331-339，1989.
- 9) 岡本祐子：成人発達研究の動向と展望，広島大学教育学部紀要第2部，No.41，207-216，1992.